

## “箱根”セミナー30年

“箱根”セミナーと“ ”つきで書いたが“ ”つきを実体験しているのはもう津久井、山下、小林の3人になってしまった。(もともと4人で始めたので抜けたのは誰だと言う見方もあるが。)復活の可能性は勿論有るが寂しいかぎりである。

しかし今年には村杉先生も参加され、本間先生共々とても元気で私も頑張らなくてはいという気にさせられた。何せ私から見ても(多分お二人以外では私が最年長)一回り以上年上なののである。思えば私が研究者として一步を踏み出した頃はトポロジー分科会の中でも、結び目理論を含む低次元トポロジーの研究者は10数名だったのに今年の東京女子大での低次元トポロジーの研究集会では参加者は100名近く、講演者だけでも35名というトポロジー分科会でも最大規模となる分野である。この箱根セミナーも一番多いときは14名を数えたが、この所の参加者数は下降気味で谷口君、古宇田君を除けば年齢も平行移動的に高齢化している。“箱根”セミナー20年の記録を見ていると「本間先生以外はワープロになって」と書いているが私などワープロからTexどまりで、イラストレーター、パワーポイントと進む最近のプレゼンテーション技術にはとてもついて行けず、歳と共に批判精神も衰え、私など皆の講演中に眠りかけている始末である。(昔からそうであったかもしれない。)

それでもいつのまにやら“箱根”セミナーの“ ”が別の意味で拡大解釈され、夏は北見、冬12月、春3月は上智と拡大“箱根”が3つにもなり、ついに四季折々、それに向けていそいそと話の種作りに励むことになっている。これは何なのだ。つまり平行移動的に高齢化すれば年齢差は相対的に縮まり(因みに常連化している河野さんと私との年齢差は一回り以上もある)、まわりから浮くことなく心おきなく話が出来るということではないか。今やこんな年寄りに十二分に時間を取って話をさせてくれる研究集会が他にあるだろうか。そうと分かれば幽冥界を異にする(天国にいける者もいれば地獄こそふさわしい奴もいるだろう)までしがみつくとというのが年寄りの務めというものでしょう。

というわけで我々に残された道は“箱根”セミナー40年に向けて頑張り通すしかないのです。そのうち他にやる事がなくなってきつとますます活発、発展していくのではないのでしょうか。

山下さん、津久井さん、今後よろしく申し上げます。お二人が頼りです。

2007年12月

小林一章